

## 久米設計

URL <http://www.kumesekkei.co.jp/>

# 任せて育てる姿勢と 年齢、経験を問わない 活発なコミュニケーションで 幅広い領域に挑む

「デザインと技術の統合」。創業者・久米権九郎が目指したこの姿勢を引き継ぎながら、領域を拡大して発展を遂げた久米設計。今や医療施設、教育・文化施設、都市開発、海外大規模プロジェクトなど幅広い領域で次々と実績を重ねているトータルソリューション集団である。その原動力となっている若手社員に、仕事のやりがいや人材教育の実態を聞いた。



本社内のアトリウムにて

2009年に竣工した新潟薬科大学  
新津キャンパス臨床薬学棟

「自由闊達。若い力が躍動する」といった社風をうたい文句にする会社は珍しくない。ただ久米設計ほど、それを実践している会社は、そうそう見られないはずだ。

例えば、入社2年目の建築設計部・齋藤聡氏は、伝統大学のキャンパスに新設される研究棟にプロポーザル段階から参加。同じく2年目の都市設計部・上田恵莉氏も全国の都市再開発案件に複数関わっている。現在、上海で進められている大規模プロジェクトの中で、ホテル棟の設計を担う建築設計部・森泰彰氏は3年目。日本全国でもまだ数カ所しかない最先端医療施設の現場を任されている名古屋支社・大城達郎氏は5年目だ。

## “人”を重んじた実践主義と コミュニケーション

快適さ、機能性、癒し、感動……人の心を多様に彩る空間を提供する、という基本思想が久米設計のトータルソリューション志向へつながっている。だからこそ、山田幸夫社長は“人”作りの重要性を常日頃から口にするという。では、久米設計流の“人”作りが、どのように行われるのかといえば、実践重視。入社後は半年の教育期間を経て、すぐに進行中の案件に参加することになる。

「どんどん仕事を任せられ、年齢や経験にかかわらず意見を聞いてくれる。最初は驚いたが、『仕事を任されている』という実感がモチベーションにつながっていった」(森氏)

久米設計には、経験に関係なく活発に周囲とコミュニケーションをとっていく姿勢が根づいている。それは社外へも広がっている。

「そもそも、入社を決め手になったのが社内の雰囲気。和気あいあいとした打ち合わせや熱い議論が、本社のアトリウム越しにあちこちから見えた」と、上田氏と齋藤氏は同じ思い出を口にする。

大城氏は、「私が担当している医療施設は

PFI案件。様々な企業の異なる立場の人たちが、それぞれに意見を持ち寄る中で進んでいく。コミュニケーションを通じて、いかに互いの常識の違いを乗り越えられるかが施設のクオリティの向上につながっていく。活発なコミュニケーションで、全員がともに創り上げていく久米設計のスタイルが大きい役に立っている」と話す。

上海案件で働く森氏も、「海外の物件を動かす場合もコミュニケーションが重要。例えばアジアでは、日本のようにステップ・バイ・ステップで順序立てて事が運んだりはいしない。スピードも速い。日本のスタンダードと海外のスタンダードの両方を把握し、コミュニケーションを深め、相互理解をしながら進めなければならぬ」と語る。

## 医療、教育、街づくり…… 幅広い領域で真価を発揮

「私は学部時代に意匠設計を学び、大学院ではアーバンデザインを学んだ。設計の専門家という立場から都市開発に参加したいと思っていたところ、事業計画も含めトータルに任される久米設計と出合った。ここでは、環境配慮型の新しい都市開発など、次々と新しい経験ができる」(上田氏)

最初に配属された部署で担当した大学研究棟案件のプロポーザルが通った齋藤氏。そのまま基本計画から基本設計へとプロセ

国際コンペで獲得した  
PETROSET CO-  
TOWERのイメージ図  
(ベトナム)今回の取材に登場した若手4人  
(東京・江東区潮見の本社にて)

スが進むのに従って、自らの業務の範囲を拡大し、キャリアも積んでいる。

「久米設計は医療施設とともに教育施設での実績が高い。この領域に興味を持っていた自分にとっては、まさにやりたかった仕事だった。誰もが人生の中で振り返り、良き思い出の地とする空間が学校。伝統ある風景を大切にしながら、いかに新しいものを創り上げていくか。それを考え、実現することに喜びを感じている」(齋藤氏)

医療、教育、街づくり、海外プロジェクトなど領域は異なるが、充実感を持っている若手が共通して感じているのが、「任せて自由にやらせてくれる。それでいて先輩が見守っていてくれて、必要な時にアドバイスがもらえる」という人材教育の姿勢だ。

様々な業務を担当する専門家が集まった組織設計事務所である久米設計だが、目指しているのは業務ごとに分断された組織ではない。総合力のあるメンバーが集い、臨機応変に役割を超えて目標へ向かっていくサッカーチームのような組織を理想と考えている。そのために、高度な専門知識を持ちつつ、社内外と緊密にコミュニケーションをとって、プロジェクトをリードしていける人材づくりを目指している。その実現に向けて若手に「任せて、見守っている」のである。